

こんな先生
いるよ!

「音を振動として分析し 環境や心理の側面から 考える」

朝倉 巧 先生

あさくら たくみ

創域理工学部
機械航空宇宙工学科 准教授

世の中に音の力を役立てたい

応用力学、振動工学などの分野で、音響工学的な研究が多いそうですね。

元々は建築学出身なのですが、ずっと以前から、建物そのものより、環境工学、特に音響について研究したいという気持ちを持っていました。それで、大学院を卒業後ある建設系企業の研究所で、騒音から建物を守るかというテーマで、音響のシミュレーションを行っていました。

2016年に本学に着任しましたが、実社会で役に立てられる音の知見を増やしていく研究に取り組んでいるところです。

音を音響の面から見てみると

音を分析的に研究すると、どんなことが分かるのでしょうか。

音を研究の対象にすると、例えば明るい音、悲しい音を聴くと人は生理的にどう感じるか、そんな見方ができます。また、川の音、森の音などの自然の音、明るい曲調と暗い曲調など、世の中には様々な要素を持った音があるので、それらが心理的にどう感じられるかを研究するのは大事なことだと思っております。

音は聞こえるもので、それは「目に見えやすい」ものでもあります。聞いている時は目に見えないですが、一つ一つを形にして研究することができますということです。

また、音そのものが心拍に影響を与えたり、快適さを感じたり、という見方もできます。それに、このような研究は音だけに限らず、視覚や触覚などの研究にも適用で

きると思うのです。

子供の頃からトランペットに親しむ

音に興味を持つようになったのは、どんなきっかけだったのでしょうか。

最初は小学校4年の時に学校の吹奏楽部に入り、トランペットを吹くようになったことからですね。地元のサッカークラブに入っていた時期もありましたが、吹奏楽の方が自分に合っていたようです。演奏は大学を卒業し、研究者になってからも一般の団体に所属して続けています。

現在は家庭もあり、それほど打ち込んでいるとは言えませんが、演奏会には奏者としてずっと参加していますし、以前は団体の企画などに参加していた時期もありました。トランペットは音がかなり大きいので、ミュートをつけて消音しながら練習するのが大変なのです。

*

若い世代の人に言いたいのは、自分が不思議だと思ったことは何でも必ず研究できるので、不思議に思ったことには蓋をしないうでほしいということです。それを書き留めておけば、一度忘れてもまた目を向ける時がやってくるかもしれません。

それに、近頃は個人と世界が身近につながっています。世界を対象にすれば、対象数が大きく増え、そこに新しいものがきつとあると思うのです。学生時代などは国内だけに閉じこもらず、広く世界に展開することを常に意識してほしいですね。

太田正人(ジエイクリエイト)

【写真左】所属する団体の演奏会で。中段右から2人目が朝倉先生

【写真中】イギリスで知り合った研究仲間たちと

【写真右】ウィーンの楽器工房で

